―文化の薫る活力ある地域づくりをめざして―　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」12 号の発行
　財団ホームページの開設

2. 普及講座の開催
　陶芸入門講座（8 回講座）
　期　日／平成 20 年 5 月～ 11 月
　会　場／勝央町公民館・工芸室　　参加者／ 24 名

「子ども陶芸教室」の様子

　子ども陶芸教室（2 回）
　期　日／平成20 年 7月
　会　場／勝央町公民館
　　・工芸室
　参加者／ 6 名

3. 事業協賛に伴うＰＲ活動
　金時祭花火大会への協賛

芸術文化活動事業

1. 展覧会の実施
【主催事業】
■公募展の開催
　公募展
　「第 5 回ミマサカコドモ絵画展」
　会　期／平成 21 年 1 月 6 日
　　～ 2 月 22 日
　会　場／勝央美術文学館
　　町民ギャラリー 1・2

「第 5 回ミマサカコドモ絵画展」会場風景

【共催事業】
■企画展の実施
　勝央美術文学館企画展への共催事業
　≪文学≫
　「木村毅の文章修行 其の三ー文章世界の仲間たちー」
　「額田六福没後 60 年ー六福とやえ子ー（寄贈資料速報展）」
　「岡本綺堂の歌舞伎 其の三
　　―『ランプの下にて』草双紙と華やかな似顔絵―」
　≪美術≫
　「どんぐり工房の仲間たち＋にじ＋きずな」
　「郷土の画家シリーズ―素描と淡彩Ⅴ―」
　「こどもセレクションⅤ―総集編―」
　「モンゴルから来た恐竜の卵と
　　ヒサクニヒコ恐竜原画展」
　関連企画「きょうりゅうの絵」展
　「郷土の画家シリーズ
　―尾崎侃没後 20 年・池吉彦没後 10 年―」
　「ＬＰレコード・ジャケットコレクション」
　「Ｓｐｒｉｎｇ　春を楽しも～！」
　「第 5 回陶芸教室の作品展」
　巡回展「第 31 回瀬戸内版画展 - 勝央会場 -」

2. 地域芸術文化振興事業
【主催事業】
■ホール事業の実施
　桂文珍独演会
　会　期／
　平成 21 年
　　3 月 20 日 (金)
　会　場／
　勝央文化ホール

「桂文珍独演会」ポスター

【助成事業】
公共ホール音楽活性化
アウトリーチ・フォーラム事業
勝央金時太鼓保存会活動
勝央町文化協会活動事業
プロリバ朗読会

【後援事業】
公共ホール音楽活性化
アウトリーチ・フォーラム事業
古部賢一＆鈴木大介 Duo Concert
作陽高等学校演劇部自主公演「ナユタ」
倉敷管弦楽団コンサート
第 5 回しょうおう町民音楽祭
横仙歌舞伎四季の公演＜冬＞

その他の事業

1．文化財資料収集保存事業
2．学術的研究及び図書の発刊事業等の
　事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します。

当財団は、皆様のご寄付により一層充実した地域芸術文化振興のための活動を実施いたします。皆様のより一層のお志をお待ちしております。

木村 毅 著『小説研究十六講』　新潮社版と恒文社版

（きむら　き　ちょ　しょうせつけんきゅうじゅうろっこう）

　木村毅の代表作。小説を志す若者たちへの小説創作の手引き書。単に文章の書き方に留まらず、国内外の名作やその分類などを体系的に紹介。松本清張は、この本をバイブルとして片時も離さず愛読し、作家デビューすると一番に木村に会いに行き、文壇から退いていた木村の復帰に尽力。『小説研究十六講』の復刻の際には紹介文を本文と帯に寄稿した。

〈新旧『小説研究十六講』〉

編集後記

　今年は、故 松本清張先生の生誕 100 年を迎えます。小倉の松本清張記念館をはじめ、全国の文学館 5 館で巡回展が開催され、その他にも、テレビドラマや映画の制作など様々なイベントが進められているとか…。
　清張は、勝央町出身の文学者 木村毅とも関係が深く、これを機会にこの二人の作家についてより研究を深め地域の皆様にご紹介したいと考えています。（E.N）

財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2009 年 3 月 31 日
編集・発行：㈶美作学術文化振興財団
印刷：㈱廣陽本社

財団法人　美作学術文化振興財団

　木村 毅 著　『小説研究十六講』新潮社版（1925 年発行）と 55 年後に出た恒文社版。恒文社版には、今年 生誕百年を迎える松本清張 が推薦文を書いた帯が見える。背景の建物は、このたび建替えられ新しくなった、木村の母校 勝央町立勝間田小学校。

作州の泥天神（土天神・どろてんじん）

作州地域では、昔から土製の天神様が造られていた。男児が出生し初めての桃の節句に親戚、知人からお祝いに贈られ、その後毎年の節句にこれを祭った。泥天神の主な生産地は、津山市と勝田郡勝央町植月、津山市宮尾（旧久米郡久米町宮尾）で、この産地の名をとってそれぞれ津山の泥天神、植月の泥天神、宮尾の泥天神と呼ばれ、これらを総称し作州の泥天神という。これらの泥天神の作者は、全て別人だが非常によく似ており、出来上がったものを見ただけでは作者を判別するのは難しい。この天神の型は、津山で型の専門家によって作られたもののようで、型造り師としては、小西米蔵、山本鬼子雄父子などがいたようである。また、植月天神発祥の地、勝央町植月中にある植月小学校が当地の泥天神や、土人形（浦島太郎など）、それらを造った型など 40 点ばかり保管していた。（現在は、勝央町教育委員会保管）。また、天神を造った型の背面に、へら書きで百忍堂作、津山京町百忍堂作、明治廿七年旧十一月等と明記されているので、津山に杉田百忍堂という型師が存在していたことが分かる。

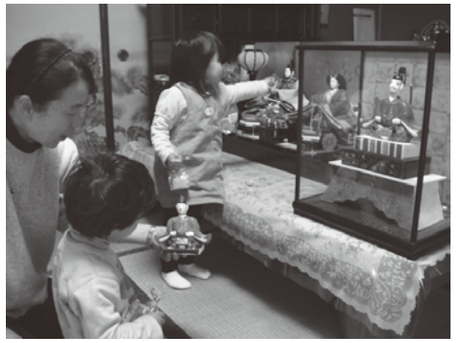
作州の泥天神は、文字通り土製でしかも焼いていないのが特徴である。従ってとても重く、破損しやすいという欠点がある。この壊れ易い天神様を少しでもこわれないようにと、原料の土に「ふのり」や「和紙」を入れたり「すさ」を混ぜたりして土に強度をもたせていたようである。現在造られている小さな天神様には、「故紙」（和紙）をほぐしてまぜ、こわれにくく工夫されている。ただし、泥天神がこのように壊れやすくしてあるには一つの理由がある。作州地方では、お雛様の節句の時にこの天神様を祭り、男児が無事成人したら感謝を込めてこれを土へ返すため川へ流す風習があった。これは、身の穢れを人形と共に流す鳥取の流し雛と同じような意で、川に流された泥天神は、自然に水に溶け跡かたもなくなってしまう。土地の人は、これを、天神様が土に帰るという。後になると、川だけでなくお宮の境内や辻堂に、泥天神の壊れたものや、まだ壊れていないものが山ほど奉納された。これも川に流すのと同じ意味である。

植月泥天神（二宮皓朔蔵）

泥天神の型。杉田百忍堂の名がへら書きで刻まれている。（二宮皓朔蔵）

＜植月の泥天神＞

勝田郡植月村（現在、勝央町植月中）の住人菅公有縁の直系五流の一といわれる植月家の五代伊右衛門が、祖先崇拝の念から木彫りの天神を作りこれを親類、知人に贈ったのが、この地方における天神造りの最初と考えられている。次の六代、伊右衛門＜1742（寛保二）－1802（享和二）＞が、土練りの天神を造り、これを希望者に頒布、後に希望者が多くなり量産するようになった。これが、植月泥天神の祖である。七代、清六は、22 歳のとき津山に移住し、津山で本格的に泥天神を製作。これを本業にしていた。清六が植月を去った後、植月の泥天神は、製作するものが暫く途絶え、明治十年頃から萬屋、佐古繁右衛門が再び造りはじめた。佐古は、



現在でも桃の節句にお雛様と一緒に祭られる

1858（安政五）年生まれで、清六の没後 18 年に出生しているため、清六から直接造り方を教わったことはないと考えられる。佐古は、元宮大工で、その頃津山の天神造りであった森川為蔵の舞台仕事を手伝っていたことがあり、生来の器用さから見よう見まねで造りはじめたと思われる。佐古は、単に泥天神だけでなく、数多くの土人形を造っていた。佐古の後を継いだのが、同じ植月に住む豊岡一郎である。豊岡は、佐古より 40 程年下で、佐古が既に老衰した頃成人し、佐古から製法を教えられ、佐古の使っていた型一切を譲り受けて泥天神をはじめ金時や桃太郎、浦島太郎、馬乗武者、戎、大黒等々を造り、製品は、植月小学校の前のよろず屋で販売していたといわれている。また、その頃、同地の東亀次郎は、豊岡と同じように泥天神を造り、だるま、福助等土人形や、竹細工等を色々造っていた。その期間は、昭和元年頃から 15、6 年までで、植月の泥天神の製造は、菅公有縁の歴史的土地柄でありながらも、第二次世界大戦のため惜しまれつつ、数十年の歴史の中に衰退し廃絶した。しかし、勝央町では昭和 58 年に、郷土美術館のオープンにあわせ美術館活動の一環として泥天神復活教室を開設。現在、同町勝間田の赤堀秀正氏が、過去の作品を参考に復活を試みている。

本文は、吉永義光著『岡山のおもちゃ』、勝央町発行『勝央町誌』を参考にした。

監修を二宮皓朔（勝田郡奈義町）氏、赤堀秀正（勝田郡勝央町）氏にお願いした。
資料画像の撮影については、二宮皓朔氏他にご協力をいただいた。

津山の泥天神

植月村で、泥天神を造っていた清六が、22 歳の時に津山へ移住して、本格的に泥天神の量産に入った。清六は、京町に移住し栢屋を屋号として泥天神の制作と販売とを本業とし生計を立てた。清六から八代、台蔵、九代、吉次郎と受け継がれたが、吉次郎が病弱であったため廃業。旅館業へ転職した。このころ、倉吉から来た徳島屋弥平が、天神造りに興味を持ち、台蔵から製法を習って作り始め、後に栢屋を継いだ。弥平の養子、芳蔵は、倉吉から来て天神の製造に習熟し、後に山根姓を名のった。この頃から天神造りが盛んになり、芳蔵の末子、弘嗣が、業を継いだ。その他に、森川為蔵、森川時次郎、広田萬次郎、広田千代、石岡たけ、高橋たね、他に十数人の女性天神造りがいた。天神製造は大正期に入る頃から徐々に衰退し、昭和十年頃を境に廃絶。第二次世界大戦後、山根弘嗣＜1978（昭和 53）年没＞が、いち早く「山根工芸社」を設立し、民芸品としての泥天神やミニ天神などの製造販売を行った。

宮尾の泥天神

宮尾の泥天神の創設者は、京都の伏見人形の流れをくむ松岡村右衛門善隣で、江戸末期の頃に始まった。当時は農業の副業であった。二代、松岡健次郎、三代、今川佐十郎、四代、岸川春次郎、五代、岸川武士（旧久米町の無形文化財に指定された）。明治中期頃から後期にかけてが最盛期で、当時は 9 軒の人形師がいた。やはり、昭和十年頃に衰退。戦後郷土玩具ブームのため岸川武士は、台座を含めて高さ 120 ㎝の大天神を製作したが、現在は、後継者不足のため休業中である。